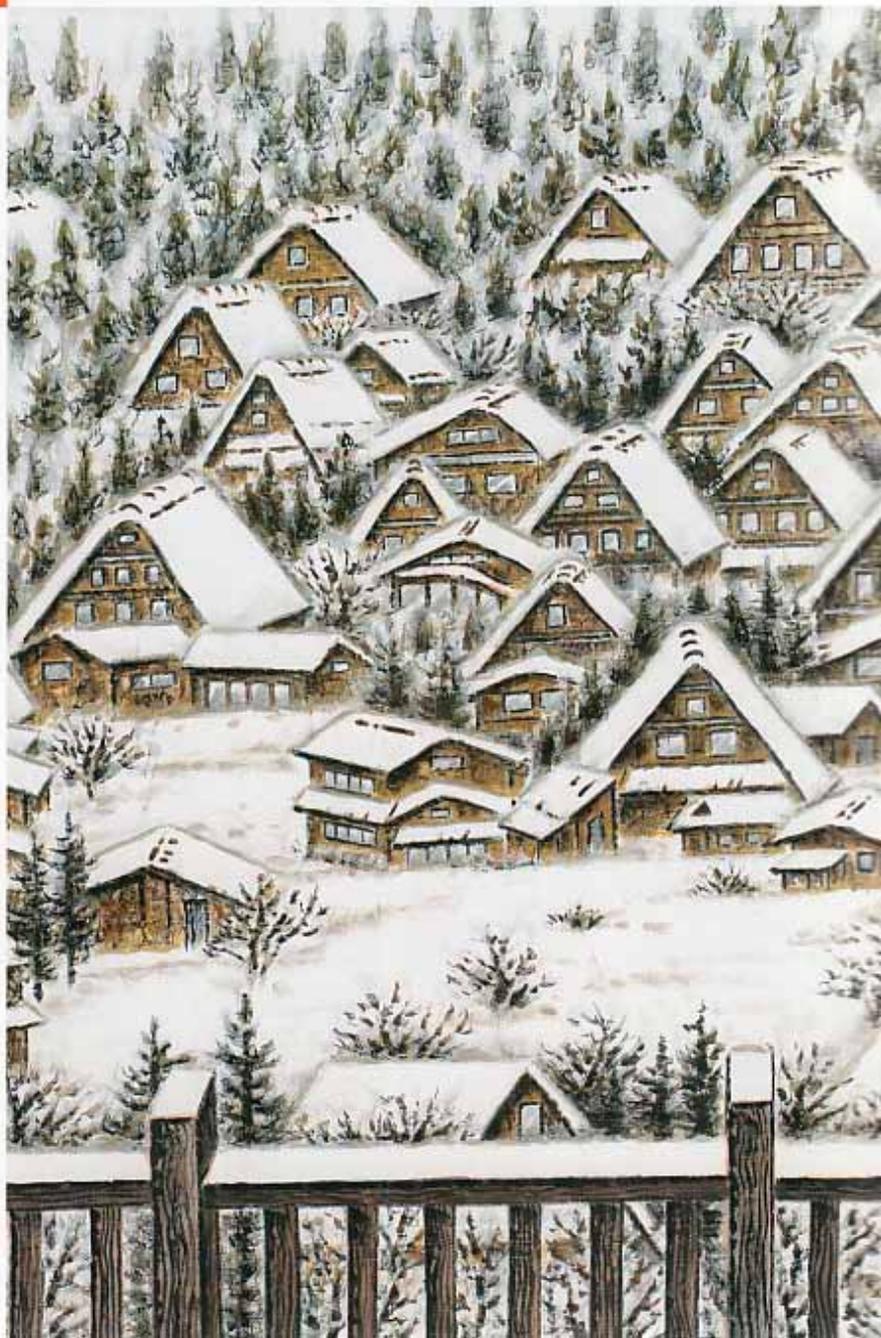


沖

1
2021

俳句雑誌[おき]



床

框

能村 研三

唐辛子小束に吊れば魔除けとも

旅荷置き木の実時雨を惜しむかな

葉付き柚子置く黒檀の床框

息継ぎの風の間に関に朴落葉

弓なりの葦の弾力鴟の声

はつ冬の居職の胡坐堂に入る

師系てふ尊きものよ波郷の忌

霜の夜の薪棚のある画家の庭

人里に熊徘徊の日の月齢

菰巻の松は男結び威儀正す

六回り目の干支

今年の干支は「辛丑」。「辛」は草木が枯れ、新しくなろうとしている状態、「丑」は種から芽が出ようとする状態、という意味があるそうだ。昨年は世の中がコロナ禍で悩まされた年であっただけに、今年が良い年であってほしいという願いは切実なものがある。コロナ禍が早く収まり、「新しくなろうとしている」「芽を出そうとしている」というロジックをもとに、新しい年への思いは深いものがある。

私にとっては六回り目の丑年の干支。牛は古くから酪農や農業で人間を助けてくれた大切な動物であったことから、その働きぶりにあやかり、丑年は「我慢」、「これから発展する前触れ」の年になるといわれている。昨年は「沖」にとつて創刊五十周年という大きな節目の年であったが、秋に予定した記念大会の開催が困難となり、延期せざるを得なくなったことは残念であった。しかし、「五十周年記念号」と『沖俳句選集

九集』の刊行が予定通り出来、多くの俳壇の先生方からあたたかい反響の声をいただいた。

こうした二つの出版物の反響を噛みしめながら、じっくりと記念大会を迎えた方がより充実したものになるのではないかと思いついた。コロナの感染状況を充分に見極めながら記念大会の開催日を考えていきたい。

今年には先師登四郎の「生誕百年、没後二十年」という年にあたり、市川市文学ミュージアムでは、夏に「登四郎、研三展」を企画しており、十年前に刊行した図録を新たに改訂し、出版することも予定されている。また、昨年九月まで二十五回にわたり「沖」に連載した「能村登四郎の軌跡」を一冊の本にまとめ「能村登四郎の百句」として出版、第八句集も春の刊行に向けて準備を進めている。

能村 研三

立 冬 の 朝 一 番 に 酒 届 く

田 や 畑 に 煙 い く 筋 獵 期 来 る

毘 沙 門 天 く わ つ と 大 綿 放 ち け り

海 鼠 に も 底 意 地 の あ り 黙 尽 く す

代 休 の 小 春 日 和 を 使 ひ 切 る

狐 火 の ひ と つ 流 れ て 一 つ 消 ゆ

太 釘 の 曲 が り 伸 し ゐ て 日 短 か

登四郎先生の句集『羽化』に、〈初風の中を出てゆく船羨し〉という句が載っている。晩年の作と思うと、「船羨し」にはまだまだ俳句の沖を目指したいのだという先生の思いが感じられる。

私の「出航」という句集の名は、今から三十年ほど前であろうか、沖の新年俳句会において〈初風の切つ先となり出航す〉が、先生の特選を戴いたことに由来する。出版の際には、先生がこの句を覚えておられて、「出航」にしなさいと命名して下さった。これから前へ進まねばならないと思ってい た身には、誠に良い名を戴いたものである。その後、小結社「出航」を許され、大結社「沖」の中にあつて、心の通い合うクルーに恵まれながら精進してきたつもりであるが、はたしてうまく前へ進んでいるのだろうか。今、先生の御句を前にして、自分の句を重ね合わせながら深く考えさせられるのである。

蒼茫集

オリフィス

辻美奈子

* 砂時計のオリフィス細く冬に入る
青鹿のまなこに真夜中が光る
座りよき愛の形やラ・フランス
天窓より月滴れる木のピアノノ
水涵るころの手触り糸底に
雪ばんば光の重さあり沈む

シテ鷗

千田百里

未来とは如何に胡桃を割つてみる
冬に入る革砥をすべる刃の音も
鳩潜く山の手線といふ囲ひ
メモになき鰻頭を買ふ小春かな
シテ鷗舞へば群れ舞ふ小春風
* 煮凝や破裂しさうな黙と黙

冬 昂

今瀬一博

灯台に錆一筋の垂れて秋
コスモスの揺れたる空のにごりかな
破蓮中央へ橋盛り上がり
*ピアノには森の静けさ冬昂
裂帛の大鼓打てり後の月
冬の星ひつぱりあつて懸かりけり

待つ形

甲州千草

墓碑はみな待つ形なり赤蜻蛉
薄れ良き木の表札や姫椿
翔つ風を待つや帰燕の横並び
冬木立膝に力を入れて立つ
*釣瓶落しの鉄臭さ残しゆく
終電の早まる都会冷まじき

賜高音

吉田政江

休日朝の洗礼賜高音
*昼灯し雨にはじまる一の酉
買って出る清掃係文化の日
青年の手首で掬ふ新豆腐
小春日や点滴だんだん眠くなる
後鳥羽院の声かも隠岐の雁渡し

旅立ち

田所節子

*冬暁の不思議な静寂夫逝けり
眼開けてよ起きて起きてよ声冴ゆる
冬紅葉救急隊に励まされ
たちまちにすべてが遺品寒昂
黄落や夫を頼りて歩み来し
旅発ちの夫を埋めゆく冬の菊

神楽面

平松うさぎ

明の虫吐息は限りなく澄めり
* 金木犀明るき香氣とふ呪文
題箋の揺るる古書肆の秋深し
解像度上げ水底の冬に入る
神楽面付けて般若となる漢

江戸の風

小林陽子

雲を追ひ雲の影ふむ秋思かな
枯びても朱尖がりたる唐辛子
江戸の風呼びある秋の花洞かな
* 鬼の子のふらり父親参観日
私雨の脚や運河に残る海猫

絹の道

森村江風

書庫奥の荷風あたりに残る虫
経度緯度山河違へず雁渡る
残照をなほ留めむと蔦紅葉
* 山茶花の咲きつなぎつつ零れつつ
水涸るる関東めぐる絹の道

割印

下村たつゑ

和綴ぢ書の紐の枯淡や秋深し
* 割印に微かな段差秋深し
人の世の一味七味やたうがらし
栗食みつぼるぼる難し歎異抄
視野に余る甲斐の稜線冬霞

空の色

菊川俊朗

ならまちの日暮は早し十三夜
昼酒に酔うてしまひし穴惑
毬栗や何かと正座させられて
* 魯田淋し青々と列をなし
空の色入れて遥けし凍滝は

並走

七田文子

呼び交はす背山妹山雁渡し
* 並走の快速離れゆく秋思
少女らの羽化するところ夕花野
記憶力良ささうな鬢鶏頭は
釣瓶落し返りそびれしブーメラン

刈田

川高郷之助

雲の影しづかに渡る刈田かな
懐郷の止まず新米湯気立ちて
見るからに秋思の顔や古書店主
* ちびちびと酒ほくほくと衣被
薬屋に米も置きあり文化の日

半音

稗田寿明

* 朝寒や半音上がる街の音
あんパンの甘さ控へめ文化の日
黄落のただ中に子の影を追ふ
俺さきに帰るわと言ふ冬夕焼
火の酒の小瓶を置いてきし枯野

鎌上ぐ日

井原美鳥

* 鶏締めしむかし鎌上ぐ日なりけり
つと寄せる眉根雄弁白マスク
漁夫が指すべつとう時化の濤煙
人肌の服薬の白湯近松忌
* 蕈選るがはじめの大事注連縄作り

林檎発つ

木村あさ子

* 白神の太き遠吠星月夜
月光を攪拌したる波淡し
子を発たすごと林檎発たせる夕べ
奈落より這ひ出る術後夜長の灯
整はぬ雪への覚悟潮けぶり

純白

(年内自選二十句)

成宮紀代子

春興や元号またぐ旅切符
地に触るる桜大樹の紀尾井坂
白樺の若葉の映ゆる魁夷邸
演能の采女萌葱の夏衣
ちらほらと男日傘の聖橋
遠き日の写真の日付山開き
築小屋に使ひこみたる季寄せあり
出穂の田んぼアートや霧晴るる
もてなしの加賀秋麗の鼓門

鵜祭の仕舞の爽気袖に溜め
スマホ繰るあまたの孤独雁渡し
潮けむり濃き暖冬の鵜原郷
石路は黄に晶子をしのぶ鵜原宿
太刀魚の竹光の照り述べらるる
余花残花気散じの歩を真間川へ
のうぜんの映えて自肅の路地住ひ
雑草も悄気りコロナ禍炎天禍
歩休めの夫に気付けり返り花
室の花封書を秤る針の揺れ
純白はこよなき自愛マスクして



『百鬼の目玉』

(自選千包)

齊藤 實

墨東の掘割に住み花ぐもり
かにかくに三月十日の隅田川
天草五橋絵踏のごとく渡りけり
さくら貝五枚並べて花にする
遠足のどつと淋しくなる電車
行く春や本に補強のセロテープ
嘶家のすたとんと落す夏羽織
年に一度外す錠前宮神輿
天下祭妻は神田の生まれにて

蛇の衣草の途方にくれてをり
父さんとあらたまる声秋澄めり
円周をさらに大きく蟬しぐれ
オクラ切る形はでんと五稜郭
野分跡ドレッシングの分離急
木の実降るいよいよ風の有頂天
実石榴を割れば百鬼の目玉あり
地吹雪に黒の恍惚貨車動く
煮凝や母の箆笥に成績表
荒巻やソーラン節を唄ふ破目
タバスコの緑のラベル聖夜来る



年間十二句

宮下 桂子

風は秋道はみなとへ真つ直ぐに
山裾を浮きあがらせて蕎麦の花
海面を飛び出す鱈の高さかな
気掛りのひとつ解決ポイントア
シーグラス砂に抱かれ春の波
若布干す千々に光れる波寄せて
床板の木目足裏に処暑の寺
芽柳のふりそそぎくる浅みどり
能登瓦朝日はじけて今日立夏
芒種かな夜雨の音のやはらかき
動かざる翡翠に息合はせをり
議論なく素足ざらつく集会所



年間十二句

小坂 尚子

東京の歯車動く冬の駅
さざなみのやうに裾野の枯れゆけり
抽斗に覚えなき鍵十二月
大いなる氣多の篝火去年今年
大寒の光の中へ産衣干す
牡蠣鍋や潮騒夜を深くせり
蠟梅や月は光をとり戻し
三椗の泡立つやうに咲きにけり
クローバーの野に靴鳴る靴の鳴る
峠より雨の匂ひや桐の花
朴の花濁世に風を吹き下ろせ
山鉾の地響き先に届きけり



飛鷹選評



能村 研三

空の一方では時雨が降りながら、一方では晴れていることで、私も以前能登大橋の上から七尾湾を眺めた時にこの光景を見たことがある。時雨は主に北陸などに多い気象現象だが、初冬に降る通り雨なので、一方では灰色に暮れかかった海に日矢が差し込む現象が見られこともある。

荒波を統ぶる 鯨の尾の太し 澤田 英紀

鯨は日本近海に冬期に回遊してくるので冬の季語とされている。この句は鯨のダイナミックな動きを活写している。荒波の中を尾びれで海面を叩くと激しい水しぶきが上がる。「勇魚」という別名もあり、鯨は哺乳類であるにも関わらず、この字の通り勇ましい魚として捉えられていたことがわかる。鯨は海面に上がった時、海水を噴水のように吹く。これも鯨は肺で呼吸しているからだ。千葉県の方では昔から捕鯨が盛んで、今でも鯨を供養した鯨塚が残されている。

残照に映ゆる 芒の踊る影 浜崎喜美子

秋の日に照らされた芒が風に揺れる姿は風情がある。秋の日は暮れるのも早く、日が沈んでからも雲などに映えて残っている光に照らされて、芒の白穂は風に靡きながらまるで踊っているような影を地に落とした。花芒の風情が的確に詠まれている。

鈍色の湾に日矢差す片時雨 牛島 晃江

雪吊の絞る 一点空に置き 坂下 成紘
雪吊は木全体を積雪から守るために外から絞るように縄でまとめられる。庭師が芯柱の天辺に立ち、一点を空に置き熟練の技で縄をうまく下へ投げ、下にいる庭師がこれを受け取り、枝に結びつける。円錐状の形に覆われた姿は見た目も美しく、趣深い風情を醸し出す。

流星や強き願ひは声にせず 加賀 莊介
流れ星が消えるまでに、願い事を三回唱えると、その願いが叶うという言い伝えがある。作者には深い願いがあり、星が流れるわずかな瞬間に声には出さず、心で願いを唱えた。

身に入むや六字名号堂に満つ 里村 梨邨
「六字名号」とは、南無阿弥陀仏の六文字のことをいい、この六字名号を唱えることによって、浄土往生への目的が達せられるとされる。堂内には読経の中に六字名号の敬虔な祈りが響いた。

人倫に背きて微熱 曼殊沙華 閑 妙子
「人倫に背く」とは、穏やかではないが、その後で微熱と言っている。人を大きく傷つけるような深刻な問題ではなさそうだ。曼殊沙華の季節の幹旋がよかった。